

全国の自治体における流域活性化に関する研究 (第 32 回全国川サミット in 旭川)

Study of Watershed Revitalization in Local Governments Nationwide
(32th National River Summit in Asahikawa)

水循環・まちづくり・防災グループ 次 長 風 間 聡
審 議 役 土 屋 信 行

1. はじめに

全国サミットは川の環境、流域の生活や歴史への理解を深め、その普及啓発を目的に平成 4 年度から開催されてきた。平成 29 年度から当研究所が常設事務局（主催自治体との共同事務局）となり、サミットで共有されてきた情報のアーカイブを主な役割として活動している。令和 6 年度は、北海道旭川市を舞台に“第 32 回全国川サミット in 旭川”として開催されており内容について報告する。

2. 第 32 回全国川サミット in 旭川

旭川市は、“川のまち”と呼ばれ、石狩川をはじめ、その支流である忠別川や美瑛川など 136 本の河川が流れており、流水は飲料水や農業用水、流雪用水として活用されている。河川空間は市民の憩いの場となっているほか、サイクリングやマラソンのコース、冬まつりの会場になるなど、スポーツやイベント、防災環境教育の場となっている。そのため、今回の全国川サミットの開催テーマ“川とともに生きる～かわとまちづくり～”は、今回の川サミットを機に“かわ”と“まち”とそれに関わる人々の魅力を発信し、川への愛着をはぐくんでいけるように願って設定されている。

一日目は、旭川駅周辺かわまちづくりの一部である北彩都ガーデンを見学した。ここは、街の玄関である旭川駅に直結した街の中心部にあたる。河川空間と街並みが融合し、“川と共存するまちづくり”を体現した空間整備がなされており、参加者は皆感心していた。



写真－1 北彩都ガーデンの視察

その後、市内のホテルに会場を移し、全国から集まった 27 自治体の首長等による全国川サミット連絡協議会総会が行われた。国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長から“流域治水と河川環境”という演題で、生態系ネットワーク等を活用し川の恵みを最大化させるとともに、流域治水で水害を最小化することで、地域価値を高めていくことなどのご講演をいただいた。



写真－2 河川環境課長の講演

次に、参加した自治体首長からの各地での“かわ”と人々の関わりや“川を活用したまちづくり”の取り組みについて紹介等が行われた。



写真－3 各首長からの報告

二日目は、多数のご参加をいただき川サミットシンポジウムが行われた。

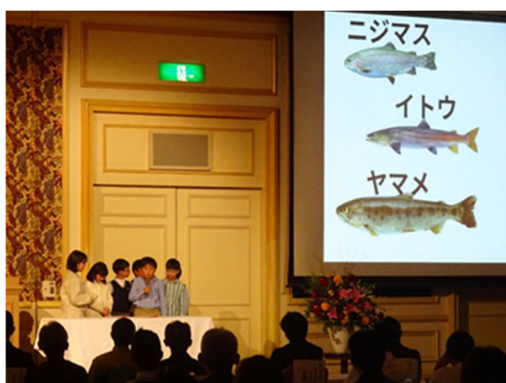


写真－４ シンポジウムの様子



写真－６ 釧路自然環境事務所の講演

まず、地元旭川市の北海道教育大学附属小学校の４年生から、総合的な学習の時間のカリキュラムに“川とともに生きるまちづくり”を位地づけた“川のまち旭川調査隊”についての発表があった。



写真－５ 小学生の活動発表

続いて、ミズベリングの活動団体から、活動のキッカケとして、橋の上から川を下るカヌーやラフティングの人に手を振ると振返してくれる景色を目指したことから始まったことが紹介された。

環境省釧路自然環境事務所からは、“自然を生かした地域づくりへネイチャーポジティブという考え方”について、シマフクロウの保全を事例に生物多様性を地域の人たちと連携して進めていく取組みの紹介があった。また、国土交通省北海道開発局建設部からは、“第９次北海道総合開発計画と北海道の流域治水”についての講演が行われ、流域治水の取組みの中でもグリーンインフラとしての整備や地域振興につながる民間ツアーや地域ブランドの醸成、“かわたびほっかいどう”による観光開発などが紹介された。

川サミットの最後には、参加自治体首長による、流域に住む人々に恵みをもたらし続ける川の大切さを再認識するとともに、川とまちが一体となってお互いに活かしながら深化し続けることを誓う共同宣言が発表された。



写真－７ 共同宣言の発表

３．おわりに

今回の全国川サミットでは、旭川市の人々の川への愛着をはぐくむとともに、人々の普段の生活に川が深く溶け込んでいることを感じた。さらに、川サミットを支援いただいた旭川市のコンベンション協会等からも、川サミットの開催が開催地の交流人口の増加や地域振興へも寄与していることを聞くことができた。

次回となる栃木県小山市での川サミットでも、全国の河川の水辺での活動を行う自治体や市民の参加による情報交換や交流が進むことを期待し、共同事務局として開催自治体を支援していきたい。